

伝統と先進性備えた 日本橋の街づくり

新原昇平氏 三井不動産
日本橋街づくり推進部上席主幹

日本橋が変貌しつつある。江戸時代に舟運・物流・商業・金融・娯楽の中心として繁栄した街は、戦後に金融を中心とするビジネス街として発展。21世紀に入り再開発が始まった。

日本橋の再生を主導する三井不動産の新原昇平氏が
国際都市「NIHONBASHI」への変貌の道筋を語った。

日本橋は、江戸時代に本格化した都市づくりのなかで、江戸城への物資や食料搬入のための物流ゲートウェイとして位置付けられていました。このため、近接する神田や銀座、八重洲辺りは商人の街、町人の暮らす街として発展しました。現在の丸の内や大手町界隈が江戸時代には武家屋敷だったのとは対照的です。

街の性格のこうした違いは現在にも受け継がれています。東京駅の丸の内側は、江戸時代に武家屋敷があった大区画がそのまま大手企業に引き継がれ、大型ビルが立ち並ぶオフィス街となっています。これに対して駅の反対側の日本橋・八重洲側は、小区画の町人地が引き継がれて比較的小規模な店舗が集まる商店街となっています。

また、江戸時代には日本橋に銀座が置かれ、小売業が集まり、江戸の経済活動の中心として機能していました。娯楽も発展し、江戸歌舞伎の小屋が繁盛するなど、町人文化の中心にもなっていました。三井グループの基となる三井越後屋呉服店はこの地で創業し、明治時代に日本初の民間銀行として旧三井銀行が開業したのも日本橋です。

日本橋には何百年も続く老舗がいくつもあり、現在も営業を続けています。にんべん、千疋屋総本店、山本海苔店、山本山、榮太樓總本舗、日本橋木屋などはいずれも江戸時代の創業です。しかし、老舗というのは歴史が長ければよい、伝統と格式があればよいというものではなく、マーケットに対し変化することでのれんを磨いてきたのです。榮太樓はかつて金つばを創作し、にんべんは商品券のシ

ステムを日本で初めて考案しました。こうした老舗の力は、最近では海外からの評価も高く、日本橋木屋は今や外国人への売り上げがかなりの比率を占めているといえます。

日本橋の老舗の誇りは江戸時代から変わらぬ利きの能力です。全国から集まる製品から一流を選んで取り扱う力こそ日本橋商人の能力なのです。

10年後見据えた再生計画

2000年代に入り、官民一体となった日本橋の再生計画がスタートしました。三井不動産は03年に日本橋街づくり推進部という専門部署を社内を設置。04年には、99年に閉店した東急百貨店日本橋店の跡地にCOREDO日本橋（日本橋1丁目ビル）が竣工し、再生計画の先駆けとなりました。続いて05年には日本橋三井タワーが竣工、10年にはコレド室町Ⅰが竣工。昨年はコレド室町Ⅱ・Ⅲがオープンし、それ以外にも現在8物件のプロジェクトが進行中です。一部は20年の東京オリンピックまでに完成しますが、全体では今後10年ほどかけて再生計画を進めていくことになっています。

再生計画ではビルや商業施設を造るだけではなく、オフィスやホテル、MICEベニュー、住宅といった職・住・娯楽などの機能を有機的に複合させることで地域全体の価値を高めるミクストユースの発想を取り入れています。ビルや施設をつなぐ通りや路地を歩きやすく整備して回遊性を高めたのもこの考え方に基づくもので、中央通りをはじめ、仲通り、

江戸桜通り、室町浮世小路などを整備しました。たとえば、仲通りは福德神社への参道として石畳で整備し、沿道に老舗が並ぶ情緒あふれる通りに生まれ変わらせるなど、日本橋全体が歩いて楽しい街になることを目指しています。

ソフト面も重要です。神田祭や山王祭では三井不動産の社員もみこしの担ぎ手を買って出ていますし、江戸時代から日本橋の旦那衆の趣味であった金魚飼育にヒントを得て、金魚の美を最新技術を駆使してさまざまな角度から鑑賞するイベント、アートアクアリウムを日本橋三井ホールで開催。昨年は65万人もの来場者を集めました。05年に開館した三井記念美術館では、三井家が代々収集してきた国宝・重要文化財を含む貴重な美術品を展示し、街の文化の香りを高めるために一役買っています。

また昨年、1000年以上の歴史がある地域の鎮守である福德神社を再建し、企業や住民のコミュニティの場と位置付けました。今後は鎮守の森や広場も整備する考えです。

賑わいが地域の一体感生む

05年に日本橋三井タワーが竣工した際、タワー内にマンダリン・オリエンタル東京が開業しました。ラグジュアリーホテルとして世界的に知られたホテルの存在は大きく、外国人旅行者の目が日本橋に向ききっかけとなりました。また、日本橋初のシネコン、TOHOシネマズができたことで、どちらかといえば高年齢層が多かった日本橋に、ファミリーやカップルの姿が増えました。

11年には日本橋のもとに日本橋船着場が完成しました。日本橋はかつて舟運拠点でもあり、魚河岸が活況を呈していました。しかし、1964年の東京オリンピック開催に合わせて首都高速道路が完成し、日本橋上空は高架道路に覆われてしまいました。再生計画では、美しい水辺空間の創出も目指しており、船着場はそうした取り組みの一環です。舩添要一東京都知事も2020年のオリンピック開催に向けて、羽田・浜離宮・日本橋を結ぶ舟運観光への期待を表明しています。10年に地域と連携して設立した隅田川流域舟運観光連絡会の中



Profile

しんはら・しょうへい ●1955年福岡県生まれ。78年東京大学法学部卒業。同年、三井不動産入社。ビルディング事業本部、商業施設本部営業部部長、中部支店長を経て、2011年から日本橋街づくり推進部長として、再開発と街のプロモーション活動を地元関係諸団体とともに推進。15年4月から現職。

心に、舟運観光の活性化を目指していきたいと思っています。

コレド室町Ⅱ・Ⅲの開業を機に、訪日外国人への対応も強化しました。コレド室町Ⅲにある和室・茶室といった和のスペースをレンタルする橋楽亭／囲庵では、外国人旅行者を対象に、茶道や着物といった日本の伝統文化を気軽に体験できるプログラムを用意しています。また、コレド室町Ⅰには、コンシェルジュが常駐するインフォメーションカウンターとして日本橋案内所を開設。観光スポット案内や街巡りのルートガイドを行っています。コンシェルジュには外国人も起用し、旅行者の母国語で案内できる体制を整えました。

日本橋の人々の見方も、コレド室町Ⅱ・Ⅲが開業した頃から変わりました。実際に人が集まり賑わいが増し、回遊するようになり、それがビジネスにも反映されることで、「一緒にやろう」という機運が生まれました。地元商店街側からの提案も増えました。

今後は地域のデベロッパーとして、地元と一緒に汗をかきながら、伝統と先進性を兼ね備えた新しい日本橋の街づくりに取り組んでいきたいと考えています。